



TITLE:

サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想(三)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想(三). 經濟論叢 1923, 16(5): 788-800

ISSUE DATE:

1923-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128026>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第六十卷 第五號

大正二十五年一月一日發行

論叢

相續税の經濟政策觀……………法學博士 神戸 正雄
階級に就いて……………文學博士 高田 保馬
價値の類型と個性……………法學士 恒藤 恭
サン・シの社會改造哲學及び連帶思想……………文學博士 米田庄太郎
本邦自殺の男女別……………法學博士 財部 靜治

時論

税法の新改正を論ず……………法學博士 小川郷太郎
發明と國力……………法學博士 山本美越乃

說苑

水戸烈公の穀物政策……………法學士 本庄榮治郎
中世末期に於ける村落の結合を論ず……………牧野信之助

雜錄

炭鑛労働者の生計……………法學博士 河田 嗣郎
簡易平均法に就いて……………經濟學士 岡崎 文規

サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想(三)

米田庄太郎

四 「ル、グローブ」紙の政治的社會的政策論

却説バザールの「サン、シモン説解説」の公開講演は、多數の青年をサン、シモン派に引き入れたが、併し其等の青年は殆んど總て、ブルジョア階級の教育ある子弟であつた。而して勞働者階級はまだ同派とは、全く關係を有しなかつた。尙ほブルジョア階級も、全體としては當時はシャール第十世に對する反抗に熱中して居たので、サン、シモン派の説には耳を傾けなかつた。只當時の思潮の影響によりて、大に浪漫的宗教的となれる彼等の子弟にして、更に社會改造を切望せるものが、同派に加入したゞけである。されば當時サン、シモン派は、佛國全體の形勢から見れば、微々たる一團體に過ぎなかつたのである。併し間もなく、同派をして大に世人の注目を惹くに至らしめた事件が起つた。夫れは千八百三十年七月の革命であつた。同派が一般の人民に其の存在を知られたのは、實に此の革命の際であつた。

此の革命の勃發する前に、サン、シモン派の内部に於ては、アンファンタンとバザールとの

二人が、教父として專制的に支配する組織が完成されて居たので、同派が此の革命に對して如何なる態度をとる可きかは、全く兩人の意向によりて決定されたのである。而して兩人は始めは全く中立的態度をとる事に決心したので、其の主旨を同派の人々に傳へた。併し夫れに拘らず、革命派に加擔する同派の青年は少なくなく、且つ革命の進行につれて、兩人の考へも變はつて來た。而して彼等は遂に革命派を助けて、君主制及び貴族を全廢し、且つ其の機會に乗じて同派の社會的理想を實現せんと決心し、七月三十日巴里市の諸處に宣傳文を揭示させた。但し其の宣傳文に於ては、封建制度が全廢され、出生の一切の特權が悉く破壊され、而して各人は其の才能に應じて地位を與へられ、又其の仕事に應じて報酬を與へられると云ふこと、及び加特力教會が滅び、新しき宗教が現はれて、基督教徒が只天に於てのみ望む神の王國、平和と自由の世界は、地上に實現されると云ふことが、特に強調されたのである。

併し革命派の首領等も亦一般の人民も、サン、シモン派の首領等の勸誘に耳を傾けなかつた。そこでアンファンタンは「ブルーデョアが尙ほ平和の中に睡り得る」ことを發見して、時勢に従ふことの必要、及びサン、シモン教の普及に一層力を盡すことの必要を覺つた。而して七月三十日の宣傳文揭示が機縁となりて、サン、シモン派思想が人々の注意を惹き、入會者の數が大に増加した。かくてサン、シモン派の運動は、一般的な宗教的社會運動となつて來たのである。但しサン、シ

モン派の人々は、さきに述べし如く始めは主としてブルジョア階級の青年から成立し、又七月革命後に於ても始め之れに加入せるは、矢張りブルジョア階級の人々であつたので、其の普及に對して直接に最も功勞ありし、バロー、ローラン、トランソン、ボー、ルツレー、ルシユヴァリエ等の講演或は説教によりて見るも、彼等の目指すはブルジョア聴衆でありしことが、明らかに察知される。又サン、シモン派の人々は、始めはサン、シモンの思想を傳承して、進歩は上より來るものと確信して居た。かくて彼等は上の諸階級の教化が、先づ第一に肝要であると考へたのである。尙ほ彼等はサン、シモン説を直ちに労働者間に布教して、其の間にあまりに過大な希望を急激に起させるのは、危険であると考へて居た。要するに彼等は先づ上の諸階級を教化し、而して其等の階級の人々が、労働者階級を指導することによりて、以て同階級の運命を改善するのが、最も穩健なる方法であると信じたのである。然るに上の諸階級間に於ける盲教が、段々成功するにつれて、又七月革命後の形勢を考へて、サン、シモン派の首領等は、今や労働者間に直接に布教する必要を認めて來た。而して巴里の労働者間に人望ありしヴァンサールの入會を機會として、労働者は續々入會し來り、遂に「労働者の階段」を設置するに至つたのである。かくてサン、シモン派の運動は一般的な社會的運動となつて來た。

サン、シモン派の首領等は、右に述べし如く其の運動が着々成功するにつれて、只將來の爲め

の一教説を布教するだけで、満足が出来なくなり、更に新聞紙を發行して直接な政治的影響をも及ぼさんと企だてゝ來た。而して此の際「ル、グローブ」紙の創立者ビエル、ルルーが、サン、シモン派に入會した事によりて、遂に同紙が其の機關紙となる事になつた。かくて同紙は千八百三十一年七月十八日から、サン、シモン派の機關紙となり、其の題名に「サン、シモン説の新聞」と云ふ副題名を附加して來た。更に間もなく各號に、左の如きサン、シモン派の政治的體系の根本思想を、掲げることゝなつた。

「一切の社會的制度は、最多數及び最貧の階級の道德的知力的及び物質的改善を目的としなければならぬ。——一切の出生特權は悉く廢止される。——各人には其の能力に應じ、又各能力には其の仕事に應じて與へられる。」

「ル、グローブ」紙はサン、シモン派の機關紙となる翌年、即ち千八百三十二年四月に廢刊されたから、其の發行の期間は甚だ短かつたが、併し其の間同紙上に於てサン、シモン派の人々の論述したことは、同派の政治的及び社會的政策論を研究する爲めに、甚だ有益であると思ふ。それで此處に其の主要なる思潮の一般を約述することゝする。但し「ル、グローブ」紙が同派の機關紙として發行されて居た期間は、同派の最盛時代と認められて居るのである。

(1) 外交政策論

「ル、グロブ」紙は先づ外交政策として、壓制されて居る諸人民の爲めに、佛國が干渉すべきことを、盛んに主張した。而して其の根本動機は、つまり夫れによりて世界的團結 (l'association universelle) の出現を促進すると云ふにあつた。其の論ずる處によれば、各時代に於て一國民は、新しき觀念及び制度を普及する爲めに、武裝して他の諸國民を指導す可く、攝理によりて選ばれて居る。かゝる國民は古代に於ては羅馬國民であつたが、中世紀以後に於ては十字軍を起し、封建制度を確立し、而して其の後又封建制度を覆して大革命を遂行せる國民、即ち佛國民である。佛國民は使徒の一切の任務を與へられたる征服的宣教的國民、一言に云はゞ眞に祭司的或は僧侶的にして、總ての國民を世界的共同團結に導くに適する國民である。佛國は舊外交の秘密な陰謀によりてゞなく、公明なる政策によりて、世界戰爭を準備せねばならぬ。

かくてサン、シモン派の人々は殊にポーランド問題に熱中し、而してポーランドを救ふ爲めに佛、英及び普の三國同盟を主張した。蓋し彼等の見る處によれば、英國は産業を代表し、普國は學問を代表し、而して佛國は兩者の紐帶即ち道德を代表するので、此の三國同盟に依て眞の歐洲政策が、確立さる可きものであるからである。

(2) 國內政策論

國內政策に於ては「ル、グロブ」は、殊に保守黨を攻撃したが、併し自由黨に賛成するのでも

なかつた。又夫れは組織的な反政府新聞でもなかつた。而して政府が、假令サン、シモン説を全然承認せずとも、若し進歩の方針に進むならば、「ル、グローブ」は政府を支持するに、敢て躊躇しなかつた。

當時世人はサン、シモン派は神秘主義の中に埋れて居ると非難したが、「ル、グローブ」紙は之れに答へて、眞の神秘主義者、眞の空想家は議會政治によりて、萬病を根治し得ると信じ、憲法、三權分立、内閣の責任、出版の自由等の言葉を、現實な具體的な事物であるが如くに信ずる人々であると論じた。其の云ふ處によれば、總ての人々は一の假作物、一の妄想を崇拜して居る。

夫れは合法と云ふことである。併し成文法律は一紙片に過ぎず、合法の愛は政治家の無能を被ひ隠くす手段に外ならぬ。尙ほ今日總ての人々に通ずる他の一不徳がある。夫れは相互に他を信用しないと云ふことである。不信用は今日の一切の社會制度の根柢に存する。何故に裁判官の不可罷免、陪審官制度、教育の自由の爲めの請願等が必要であるか。是れ治者と被治者との間に存する相互の不信用の爲めである。而して政府は一切の善の根元であらねばならないのに、今や人々は益々政府は一の潰瘍であると信じて來た。

尙ほサン、シモン派の論する處によれば、現在の各黨派は夫れ々、長所と共に短所を有つて居る。先づ王黨は秩序を強調する長所を有するが、併し其の云ふ秩序なるものは、過去の秩序にし

て當然滅亡す可きものである。又王黨は加特力教會と提携して居るが、然るに加特力教は本來物質を精神の爲めに犠牲にして居るから、今後の社會に存續する力を有しないものである。共和黨は其の清新なること、理想を尊重すること、人民を愛すること等の長所を有し、又當然滅亡す可き舊秩序と戦ふて居るのは正當である。しかし暴力的革命を重要視すること、及び秩序の原理を缺いて居ることは、其の短所である。更に人民主權の空想に囚はれて居るのは、其の一大短所である。人民主權は一切の秩序、一切の社會的指導、勞働の正當なる配分及び結合、一切の政治の原則と矛盾して居る。夫れは結局無政府狀態を齎らさねば己まないものである。總ての人々が支配すると云ふは、何人も支配しないと云ふことに外ならぬ。而して王黨と共和黨との間に介在する現王朝黨は、中庸を得て居るとも云ひ得られるが、併し何等の主義、何等の理想をも有しないのは、其の最大短所である。其の行動の根本動機は恐怖心である。夫れは王黨を恐れ、ボナパルト黨を恐れ、殊に民主主義を恐れて居る。而して夫れは只恐怖心によりてのみ行動し、何等の積極的活動をもなさんとせず、政府と國民とを疎隔する恐ろしき不信用によりて麻痺されて居る。現王朝黨はサン、シモン派の主張するが如き新政治を實行する力を、全く缺いて居るのである。

サン、シモン派は其の新政治論を、ル、グローブ紙上に於て、ブルジョア及び勞働者の両者に、同時に宣敎せんとしたので、ブルジョアには勞働者に對する愛情も涵養せしめ、又勞働者

にはブルジョアを尊敬する念を涵養せしめんと企てた。而して此の如く兩者の調停者の地位に立ち、以て當時の社會を脅かしつゝ、ありし慘憺たる革命を、平和な改革によりて豫防せんとしたのである。然らば其の革命を豫防する平和的改革とは、如何なるものであつたかと云ふに、其の根本的なものは、懶惰の禁止、即ち遺産相續の廢止であつた。(但し遺産相續の廢止に就て、ルグローブ紙の論述して居ることは、さきに「サン、シモン說解説」中に述べしこと、同じものであるから、此處に繰り返して述べることを避ける。)

併し遺産相續を廢止し、總ての出生特權を廢止したる後の將來の社會は、如何にあるであらうか。ル、グローブ紙の説く處によれば、吾人は軍隊を考察することによりて、將來の社會組織を想像することが出来る。軍隊と云ふ廣大なる團體はよく編制され、一全體を形成し、而して其の位階は世襲的でなくして、才能技量によりて決定され、且つ一人の最上主長が總體を指揮する。是れ將來の社會の姿である。但し、將來の社會は軍隊の如く、破壊を目的とするものでないから、普魯西的訓練を要しない。而してル、グローブ紙が、新政治の一例として、地方自治團體が如何に組織さる可きかを説述して居ることは、甚だ興味あると思ふから、此處に其の一般を簡單に述べて置く。

地方自治團體に於ては、學問、産業及び藝術或は道德は、市町村長、教師及び僧侶によりて指導さ

れるであらう。市町村長は助役及び評議員と協議して、勞働者を工場に配置し、仕事に必要な器械道具を彼等に配分する。市町村長は其の地方團體が附近の地方團體から必要なる材料を如何に供給せられ、又之れと交換して如何に自己の材料を供給するかを嚴密に監督する。生産物の一部分は學者及び藝術家の待遇に當てられる。市町村長は種々なる機能或は職務の給料を決定する。夫れでは市町村長が專斷に陷る危險があると云ふ、人々があるかも知れないが、併し其の決定は出生の偶然による決定よりも、不正の度合が常に小なるものであらう。教師は總て學者團或は大學に屬し、而して大學は三部に分たれる。其の一は哲學部にして一般學を考究し、他の二部の上に立つ。其の二は理論的學者或は學問を完成する學者の部、其の三は實際的學者或は學問を教授する學者の部である。現在のアカデミーは何等の共同的觀念をも有せざる多數の學者を、只集合するに過ぎないが、理論的學者は一の組織的團體を作る可きである。今日の高等なる學校では、教授は學生から離れ、而して學生をして勝手に勉強させて居るが、將來の高等なる學校に於ては、教師は常に學生と一緒に研究し、又學生をして夫れ／＼己れの眞の天職を見出させる爲めに、總ての職業の勞働者と接觸させるであらう。小供は其の稟性に從ふて教育され、最早其の出生に從ふて教育されないであらう。終りに僭倂は市町村長及び教師の上に立ち、道德を監視し、藝術家に靈感を與へる任務を盡すであらう。

地方自治團體の組織は、社會全體に於て復現されるであらう。總ての人々は財産所有者であるであらう。是れ總ての人々は公吏、即ち夫れ／＼一定の社會的職分を盡すものであるからである。勿論右の如き社會改造は、一朝一夕に成就されないであらう。しかも夫れは遂には成就されるであらう。而して夫れは下からでなく、即ち民主主義によりてでなく、上から即ち一大偉人の意志によりて實現されるであらう。無益な憲法論や、無効な議會的贅辯を已めよ。天才の優勝并に命令及び服従の觀念に對する今日の反逆は悲しむべきものはない。シャル第十世に對する服従は奴隸的服従に外ならぬが、ナポレオンに對する服従は、情操の最も美なるもの、即ち忠誠である。

サン、シモン派は右に述べし如く、新社會組織は彼等の切望する「平和のナポレオン」の出現によりて、實現されるものと信じ、而して其の出現を待つて居たが、併し其の間を無爲に過すを欲せず、現在の制度と調和し得ると信する種々なる社會改良策を、ル、グローブ紙上に於て盛んに主張した。此處に其の重要なもの二三を述べて置くか、先づ彼等の重要視したのは、國債償還基金を廢止し、其の基金を基礎として銀行を設立することであつた。彼等は一の國民銀行を設立し、之れによりて無數の地方銀行を援助し、而して懶惰者の金を集めて、之を信用される値ある労働者に貸與することが、労働者階級の眞の解放手段であると主張した。彼等の信する處では、銀行

は決して單なる金融機關に過ぎざるものでなく、實に一の政治的機關、否な宗教的機關とさへ認めらるべきものである。更にサンシモン派が直接に實行し得られる公的事業として、最も強調したのは、交通の發達であつた。殊に鐵道の布設は彼等の最も重要視せるものであつた。佛國の政治家が尙ほ大に躊躇しつゝ或は恐怖心を抱きながらに、鐵道問題に觸れて居た際に、サン、シモン派が其の哲學的見地から見て、大膽に鐵道布設の必要を主張したのは、一大卓見とも見做し得られる。サン、シモン派の人々は、實に鐵道の發達を以て、諸國民を團結させる主要手段、世界的團結の根本手段と考へたのである。而して佛國に於ける鐵道發達の歴史を考察すると、吾人はサン、シモン派の人々が、實際に貢獻せる處甚だ大なるを認めざるを得ないのである。

(3) 藝 術 論

ル、グループ紙上に於て發表されて居るサン、シモン派の藝術論を見ると、藝術家は社會の頭に置かれて居る。併し藝術を道德及び宗教と混同して、藝術家を僧侶の手先に過ぎないものゝ如くに見る謬見に陥つて居る。要するにサン、シモン派の藝術論はあまりに功利的にして、藝術の自律性を認めないのである。サン、シモン派の説によれば、劇場は講壇の一種に過ぎない。而して其の指揮監督は、政府の手によりて行はるべきものである。藝術は其の一切の形式に於て、國民の共同的大觀念を表現し、人道的情熱を燃えさせる、教育的性質を具有する國民的祝祭を作る可

きものである。而して藝術は結局宗教に歸着する。是れ詩歌は宗教の娘であるからである。異教的詩歌は物質を讚美した、是れ異教ヘカテムは物質主義的であつたからである。又中世紀の詩歌は心靈を讚美した、是れ基督教は心靈主義的であつたからである。併し新汎神教的なサン、シモン派の詩歌は、靈肉の合致、心靈と物質との合一を讚歎するであらう。

藝術は政治の主要任務の一である。ルイ、フエリッブの君主政治の如き、藝術を無視せるものは、其の事によりて明らかに其の無力なるを證明して居る。併し今日藝術は如何なる状態にあるか。藝術は民衆から孤立し、只懶惰階級の娛樂に過ぎないものとなつて居る。夫れよりして藝術を特質附ける靈感及び道德性は、今日の藝術に全然缺けて居る。今日の畫家は繪畫の技術が世紀の時勢に従ふて變化すること、及び今や繪畫がパノラマやディオラマの與へる例に従ひ、科學及び産業の爲めに役立ねばならぬことを理解して居ない。今日の彫刻も同様に無力である。又今日の建築家は只中世紀の建築術を復興することにのみ力を注いで居るが、然るに既に消滅せる觀念を表現する其等の建築物は、當然消滅すべきである。ルーヴル、ヴェルサイユ等の舊時代の總ての宮殿は、よろしく破壊さるべきである。更に吾人が最早加特力教の僧侶や領主を欲しない今日、教會や城は何の役に立つか。其等の建築物は當然他の種の建築物に地位を讓るべきである。

今日の文藝も亦造形藝術と同じく其の天分を誤解して居る。歴史家は中世紀の研究に没頭し、

詩歌は無力の中にもがき、舊時代を覆せる浪漫主義は、政治に於ける自由主義と同じく、文學に於ける無政府狀態を表示して居る。而して同派の作者中にはヴィニイの如く、明かに絶望に陥つて居るものがある。是れ彼等は彼等の無力を強く感じて來たからである。又多くの作者はバルザクの如く、純娛樂の作を出版するに過ぎないまで墮落して居る。併し吾人は今日の文藝に就て、全然失望してはならぬ。社會的藝術は始まりかけて居る。劇場は神秘劇の時代の如く、再び信仰の最善の學校となるであらう。既に懶惰者を排斥する劇や小説が現はれて、新らしき傾向を示して居る。ペランゼーは其の歌によりて、時代の思潮から靈感を得る詩歌が、如何に強大なる力を有するかを證明した。ヴィクトル、ユーゴーの作に於ても、今や重大なる變動が認められる。サンシモン派は總て其等の新傾向を大に獎勵し、而して一切の藝術をして、道德的及び社會的性質を具へしめる爲めに、専ら努力せねばならぬ。

サン、シモン派の活動が最高頂に達せる時代に於て、其の機關紙ル、グローブ紙上、同派の人々が世人一般に對して唱道せる思想の大要は、以上述べ來りしが如きものであるが、然るに間もなく同派の内部に於て一大分裂が生じて來た。而して夫れは婦人問題、殊に性道德問題に關してであつた。それで余は次に此等の問題に關して、同派内に起れる分裂の狀態の一般を述べる事とする。